

[飴屋法水 全仕事]
Ameya History

★1996年9月28日に公開された、福居ショウジン監督「ラバーズ・ラバー」撮影中の飴屋法水。

■1961 山梨生まれ　■1978 劇団状況劇場入団 ➡ see P064



★1

マ ー キ ュ ロ

1984.11.15〜18／1985.2.21〜24［東京グランギニョル］



★2



飴屋とほぼ時を同じくして状況劇場を退団し、脚本を担当することになったタガネ氏（当時の飴屋の恋人でもあった）とともに辞書をめくりながら、マとキュとロの音がイイと、タイトルを「マーキュロ」と決定。そのタイトルに基づくストーリーをと、水銀の入っているマーキュロを血液と入れ替えることにより金属人間……アンドロイドならぬマーキュロイドが生まれるというアイディアが設定された。
バイト先のボーリング場の倉庫をタダで稽古場とし、ボーリングの音が響く中、稽古は週に3回のペースで二ヶ月半おこなわれた。全員が素人だったため、浅田役の役者には、セリフの間、一行に一回忘れずに、「スキゾ」と「パラノ」を交互に挟ませる作業をさせたり、聞き取れないほどの小声で会話をさせ、それをなんとか聞き取る、という作業を与えたりすることで、表現ができない役者たちでも、舞台に会話のリアリティが充足するような方法が、飴屋の演技指導であった。

■

「とにかく、会話するとき役者に無意味に正面を向かせなかった。なんでお互いで話してるのに、正面むいて大きな声で話す必要があるんだって。でも、ひどいのになると斜め上の空中見上げて語っちゃうからなあ。演説かよって。」

■

また、初稿脚本に「幻想的な月」と書いてあれば、それはスライド・プロジェクターを使い直径3メートルの大きさで月面の写真を映し出すことでしかないため、「直径3メートルの月」と上演台本をいちいち設計図のように書き直していく……というような作業に顕著なように、飴屋が打ち壊したい対象としての文学性、叙情性などを、あえて脚本のタガネ氏に依存し、飴屋はそのセリフを棒読みにさせたり、セリフと距離をもった音を入れたりと、タガネ氏が構築した世界を破壊していくことを、自身の演出スタイルとした。

■

「マーキュロ」はPILのフラワーズ・オブ・ロマンスの反復ビートに合わせて、学生服の集団がイスに座って踏みならす足だけが見える衝撃的なシーンからはじまった。実は足を踏みならすオープニングのアイディアは飴屋が少女漫画で見たイメージで、それを唐氏に話

■1985.2.14 新世紀末ライブ［後楽園ミニテント］／東京グランギニョル



これはきっと自分には才能があるようだから、もうちっと続けてみようと思ったんだ（笑）

したところ「あるタップダンサーの物語」のトップシーンで採用されたのだが、あがってきた戯曲を読むと飴屋の描いたイメージとかけ離れていたため、それをちゃんとやりたくて、ここで実現したという。
ジャパンで踊る手術服の嶋田久作、伊福部昭でオナニーする少年たち、細野晴臣の「第三の選択」と呼吸音が混ざるラストシーンまで、舞台と音楽は密接な関係を持っていた。床を踏む靴音から黒板にチョークがあたる音まで、とにかく一貫して好きな音で舞台が貫かれている快楽の中で、舞台は作られていった。

■

しかし、上演してみると、ポスターなどの宣伝美術を丸尾末広氏がおこなっていたにもかかわらず、初日は15人ほどの客しか集まらなかった。が、初日以降、口コミでか、観客席には演劇ではなくパンク、ニューウェイヴのコンサートの行くような服装をした少女が日増しに多くなり、最終日は劇場に入りきれない満席となる。しかしあくまでも小さな劇場であり、この公演を見た観客数はわずか350人である。この時のみ、演劇評論家やマスコミあてに招待状を送ったが誰も観に来ず、その嗅覚の無さに落胆。以後二度と招待状は送るまいと決心したという。

■

「いや無名なんだから、あたりまえなんだけどね。でも、このときの350人、再演の550人の中には、福居ショウジン氏や、岡崎京子氏や、ケラ氏や、田口トモロヲ氏や、塚本晋也氏や、小沢剛氏や、中ザワヒデキ氏や、細野晴臣氏や、越美晴氏や……いろんな人がいてくれた。招待もしてないのに。だから無名なんてほんとは関係ないんだよ。別に今思えばたいした舞台じゃない。それでも、何がしかを嗅ぎつけてくれた人が来てくれたんだろうね。最終日の満員の客席を見て、ああ、これはきっと自分には才能があるようだから、もうちっと続けてみようと思ったんだ（笑）。」

■新世紀末ライヴ

「マーキュロ」を観た、当時ペヨトル工房の今野裕一氏の誘いで、再演までの間に、後楽園のミニテントであった「新世紀末ライヴ」に、ラディカルTV、細野晴臣、白虎社などとともに出演。「マーキュロ」では嶋田のお腹から出て来たのはエイリアンだったが、ここでは飴屋が出てくるという衝撃的なシーンが展開された。このシーンは、日本TVの「徳光和夫のテレビ・フォーラム」に東京グランギニョルが出演した際にも演じられた。



★写真雑誌「エンマ」のために撮られた「マーキュロ」のシーン。P・遠藤晴穂

1★生徒1（矢車剣之助）。手に持っているのは資生堂の猫。
2★教師役の嶋田久作。
左★写真雑誌「エンマ」のために撮られたシーン。
「マーキュロ」ではエイリアンが出てきたが、ここでは飴屋法水が内臓から出現。P・遠藤晴穂
下★チラシ



★マーキュロ（再演）［東京グランギニョル］

公演名――――マーキュロ
公演日程――――1985.2.21〜24
公演場所――――アートシアター新宿
キャパシティ――――50人
公演回数――――4回
観客動員数――――550人
チケット――――1,500円（前売り／1,300円）

出演――――嶋田久作［教師］／Y［三上］／飴屋法水［チンカジョン］／矢車剣之助［生徒1］／小川伸郎［生徒2］／武者小路実政［生徒3］／テクマクマヤコ［生徒4］／和田英亮［生徒5］／行谷あたる［生徒6］／大野さゆり［三上の姉］

スタッフ――――初演に同じ

★マーキュロ［東京グランギニョル］

公演名――――マーキュロ
公演日程――――1984.11.15〜18
公演場所――――アートシアター新宿
キャパシティ――――50人
公演回数――――4回
観客動員数――――350人
チケット――――1,500円（前売り／1,300円）

出演――――嶋田久作［教師］／Y［三上］／飴屋法水［チンカジョン］／矢車剣之助［生徒1］／小川伸郎［生徒2］／武者小路実政［生徒3］／テクマクマヤコ［生徒4］／和田英亮［生徒5］／行谷あたる［生徒6］／大野さゆり［三上の姉］

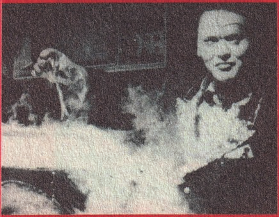
スタッフ――――脚本・蟹汽鍋／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋鳥羽デック／舞台美術・飴屋法水／照明・飴屋法水／照明操作・星野義雄／衣装・中島はるみ＋野口和子／装置・星野義雄／小道具・森賀仁美＋佐藤千里／制作・牧野弥栄子／ポスター画・丸尾末広／協力・川津英昭＋IQ230＋株式会社財美

MERCURO



1★左から平田昭彦（Y）、ナウシカ（武井龍秀）、美晴（テクマクマヤコ）。／P・YUKIKO INOUE
2★ヘルムートの妹ニナ（ももやまてふ）。／P・YUKIKO INOUE
3★白井家の執事ペップラー（行谷あたる）。／P・YUKIKO INOUE
4★ヘルムート白井博士（嶋田久作）。／P・YUKIKO INOUE
5★丸尾末広氏が行商人マルオとして登場。左に嶋田久作。／P・YUKIKO INOUE
6★チラシ





ガ　ラ　チ　ア

1985.5.30〜6.4［東京グランギニョル］







「マーキュロ」の初演が話題となり、再演には「アートシアターの1日の観客動員新記録」と言われるほどの観客が集まったことが自信になってか、すぐに第2弾を企画する。飴屋にいわせると半年に1本やらないと劇団経営がなりたたない、という判断もあったようだ。

■

この時、角川書店から出版されていた文庫サイズの雑誌「月刊 小説王」に連載されていた荒俣宏氏の「帝都物語」を演れば制作費が出るらしいと編集者である今野裕一氏や後藤繁雄氏から話を持ちかけられ、（実際はポスターを作ってもらい、他に制作費が15万程出ただけだったようだが）、加藤を出してお金がもらえるならいいかと、すでにタガネが決めていた「ガラチア」というタイトルに「帝都物語」という副題がつけられた。

■

「帝都物語」のあらすじだけ読み、加藤という軍人が出てきて東京改造計画をすればいいのだろうという程度の気持ちで話を引き受けたが、何と飴屋はそのまま一度も帝都物語の原作を読まずに舞台をつくったため、軍服を着た加藤はゲイになり、パンク少年に右翼団体と勘違いされ、さらに加藤は実はロボットであり、東京改造計画により人間が死滅した東京で、立花ハジメのレプリカントＪＢにのって踊るエンディングという、とんでもない話となった。それを観に来て「いいんじゃない」と笑って帰っていった原作者の荒俣宏氏の度量にもすごいものがある。しかし、この舞台がきっかけとなり、後に嶋田久作氏は映画版「帝都物語」に出演、役者として独立していくこととなる。

また、そのエンディングのため、ポスターにはラディカルＴＶの原田大三郎のスクラッチ・ギブス（後に立花ハジメ氏のライブツアーで使用）のクレジットがあったが、残念ながら舞台には間に合わず使われなかった。

■

叙情性と距離をとったつもりの「マーキュロ」であっても、感情移入した観客が泣いたりしたため、それを見て気持ちが悪くなったという飴屋は、二作目の「ガラチア」では、音楽の選択を、ディーボ、立花ハジメ、レジデンツなどに偏よらせ、ギャグをちりばめ、より徹底して、乾いたものを求めた。舞台上のノイズも、床を踏む靴音や呼吸音ではなく、爆竹やグラインダーの乾いたノイズ、電子銃のピコピコ音などを多用。

■

役者陣も、暑いのが苦手で冷蔵庫に住んでいる博士に嶋田久作、ゲイの加藤に矢車剣之助、その他、超絶棒読みのももやまてふ、フラワーテイストのテクマクマヤコなどを中心にすえ、また丸尾末広が「デイヴィッド・ボウイそっくりな奴がいる」と連れてきた武

GALATIA+++

観客に共感されるっていうか……自称ナイーブな少年少女に共感されることへの嫌悪は常にあったね

井龍秀は、好きな映画が「風の谷のナウシカ」だったことから、ナウシカという名の何故か江戸っ子巻き舌のパンク少年を好演、笑いをとった。

■

ロバート・ワイアットが静かに流れる中、脳ミソが吹っ飛ぶシーンや、嶋田久作がレジデンツの音の中、血液が凝固しない薬物を投与した上で、電気ドリルで手に穴を開ける拷問シーンの怖さは圧巻であったが、全体としては、飴屋の資質のひとつである、くだらなさ、かわいいばかばかしさ、の側面が全開の舞台だったといえる。

■

「観客に共感されるっていうか……自称ナイーブな少年少女に共感されることへの嫌悪は常にあったね。来るんだよ、突然、家に。私両性具有なんです、とか、私セックス恐怖症なんですとか、私、大人が大嫌いなんです、とか言っちゃって。イヤ、皆なにかを抱えてるんだろうけどさ、オイラ、カウンセラーじゃないんだから。……犯してやりゃ良かったな。」

■

一見、ロボットや人形への偏愛にあふれて見える作品だが、しかし、物語の下敷きとなっているのは、舞台終焉後に客席に流された、ディーボのモンゴロイドという曲に触発された、先天性異常、「ダウン症」への強い興味であった。ガラチアでの、このダウン症への強い興味は、後のアート活動や動物商まで連なる飴屋の活動を示唆する点で、極めて重要であろう。

■

「ダウン症で生まれてくる子供って皆、一様に同じ顔……、時代や場所が違っても、クローン人間のごとく、一様に個性を剥奪された、同じ顔で生まれるんだよ。それが皆、モンゴル民族典型の顔なのね。つまり、ダウン症児は、人間に個という差異、いや民族という差異すらが発生する以前の顔で、この世に生まれてきて生きてんだよ。」

■

ちなみに、この頃、芝居づけになるのを嫌う劇団員のために、カセットブック「東京グランバザール」を企画・製作。嶋田久作氏のアフロなキーボード曲、矢車剣之助やももやまてふのバンド、真ん中デラックスによるピンクレディーのカバー、後に、森高千里のバックバンドにもなったカーネーションのメンバーとなる鳥羽テックのテクノ、ガラチアの劇中でテクマクマヤコも唄った、夢野ワンダのバンド、タイムスリップ（飴屋の状況劇場時代の友人、佐野史郎、石川真希、そして嶋田久作もベースで参加）の曲などが収録されている。

■

しかし、そんな飴屋の気遣いも空しく、この公演のあと、ももやまてふ、テクマクマヤコ、行谷あたる、Yなど、役者を続ける気など基からなかったメンバーがほとんど離れたため、第1期東京グランギニョルは事実上解散状態に陥る。

★ガラチア（帝都物語）［東京グランギニョル］

公演名――ガラチア（帝都物語）
公演日程――1985.5.30〜6.4
公演場所――アートシアター新宿
キャパシティ――50人
公演回数――6回
観客動員数――800人
チケット――1,700円（前売り／1,500円）

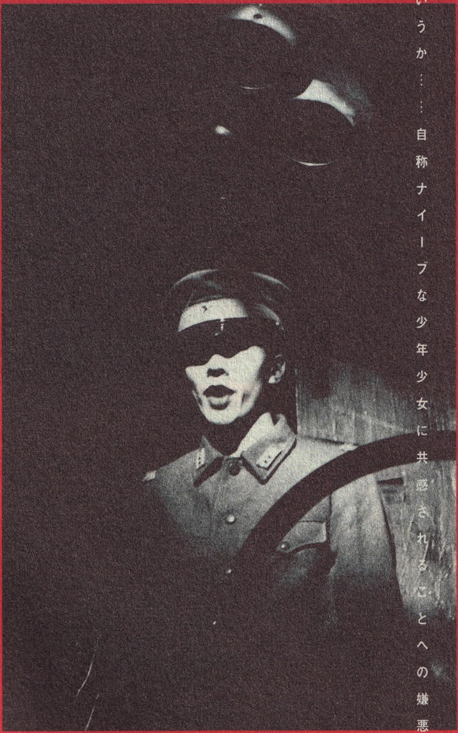
出演――嶋田久作［ヘルムート白井博士］／飴屋法水［ペヨトル=ヘルムートの父］／Y［平田昭彦］／武井龍秀［ナウシカ］／矢車剣之助［加藤］／行谷あたる［ペッブラー=白井家の執事］／ももやまてふ［ニナ=ヘルムートの妹］／テクマクマヤコ［美晴=平田の妹］／丸尾末広［行商人マルオ］／佐野領域［工員］／大橋二郎［工員］

スタッフ――原作・荒俣宏／脚本・BD＋飴屋法水／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋鳥羽テック／美術・飴屋法水＋Y／衣装・矢車剣之助＋ももやまてふ／装置・星野義雄／小道具・森實仁美＋佐藤千里／照明・飴屋法水／照明操作・星野義雄／演出助手・岡野昌代／制作・岡野昌代＋小柴ひろ子／宣伝美術・丸尾末広

★カセットブック「東京グランバザール」



★加藤（矢車剣之助）／P・HARUMI AIDA









1 | 2
3

ラ イ チ 光 ク ラ ブ

1985.12.20〜25／1986.3.27〜4.2［東京グランギニョル］

「ガラチア」の公演の後、事実上解散状態となったため、飴屋はオーディションを敢行。第二期メンバーともいえる石川成俊、上野仁などが入団。しかし女優は、採用にいたる人材には出会えなかった。

■

そこで、「マーキュロ」や「ガラチア」を観ており、当時「面白予約ショー」というＴＶ番組で、東京グランギニョルを紹介してくれていた越美晴さんに連絡をとり出演依頼。「出る、出る」と即座に出演が決まった。飴屋は越美晴のとにかく小さなところと、その声と、初対面の時のオレンジの皮のコートが気に入ったらしい。

■

その頃、日本航空の飛行機事故が起こり、たった一人助かった女の子のインパクトが強かったことから、破壊された機械と焦げた肉片が飛び散ってる中で女の子が一人呼吸しているイメージと、当時「ビックコミック・スピリッツ」に連載されていた楳図かずおの漫画「わたしは真悟」のイメージを重ね、下敷きとする。

■

未来派をきどるテクノロジーにいかれた少年達の秘密結社、「光クラブ」、真悟とフランケンシュタインをだぶらせた人造人間ライチ（嶋田久作）、フランケンシュタインに花を渡した少女と「わたしは真悟」のマリンをだぶらせた少女（越美晴）の物語を、タガネ氏と練り上げていく。

■

「ライチは、ベヨトル工房の今野裕一氏が中華料理を御馳走してくれた折りにデザートで出てきたライチが、錆びた鉄のような堅い殻の中に、半透明のドロドロしたものが入っているというところがエロだと感じて……。何か匂いも果物っぽくなくて、だからライチの実を人造人間の燃料にすることにしたんだ。植物を燃料にするテクノロジーってのが何かイイと思った。さかのぼれば、子供の頃読んだ童話、エルマーと竜に出てくる竜がミカンの皮を食べて生きてるのね、そういうのもあったかな。」

■

始めてとは思えない程、越さんの稽古はスムーズで、ライチ役の嶋田ともども好演。

■

SPKの音に乗ってサーチライトを交錯させるトップシーン、袋づめの少年をロープで吊るす「光クラブ」の集団リンチシーン、ジャイボ（飴屋）が鉄製のドリルペニスで女教師を犯し股間から噴霧器で血のシャワーが飛び散るシーン。工事現場のベルトコンベアーで殺された少年たちが次々に破棄されるシーン、止まってしまったライチの横でマリンが眠り続けるラストまで、ストーリーが古典的なぶん演出的な遊びが多く、東京グランギニョル時代を通し、エンターテイメントとしては最も充実した完成度の高い舞台となる。初演再演を通じ多くの観客も集め、この舞台が東京グランギニョルへの評価を決定的なものとしたと言えるだろう。

■

ちなみに、計算が得意なライチの設計者デンタクを演じた（佐野領域）も印象的で、この時の印象から飴屋は、その後退団した彼をM.M.M.時代に呼び寄せ、後の「スキン」の主人公リカ役に抜擢する。

■

また、この舞台での、ジャンクを集積させた舞台美術は、飴屋の描いた絵コンテを星野義雄と奥村浩によって忠実に再現しながら作られたが、この舞台に招待した美術家の三上晴子氏との後のコラボレーションへと繋がっていく。



★チラシ

■越美晴「Boy Soprano」

越美晴のコンサートにサポートとして出演。総合演出は画家、金子國義氏。「ライチ」と同じ半ズボン姿の飴屋が金子氏の演出で大きなミラーボールを転がすシーンが美しかった。

1★左からダフ（大橋二郎）、デンタク（佐野領域）、カネダ（奥村浩）。
2★ライチ役の嶋田久作。／P・YUKIKO INOUE
3★左から嶋田久作（ライチ）、ヤコブ（上野仁）、ニコ（石川成俊）、ダフ（大橋二郎）に捕らえられるタミヤ（武井龍秀）。右はゼラ（常川博行）。
4★マリン（越美晴）とライチ（嶋田久作）。
5★女教師役の萩尾なおみとジャイボ役の飴屋法水。

★ライチ・光クラブ［東京グランギニョル］

公演名	ライチ・光クラブ
公演日程	1985.12.20〜25
公演場所	下北沢　東演パラータ
キャパシティ	150人
公演回数	6回
観客動員数	1200人
チケット	1,800円（前売り／1,600円）

出演――――常川博行［ゼラ］／嶋田久作［ライチ］／越美晴［マリン］／飴屋法水［ジャイボ］／武井龍秀［タミヤ］／矢車剣之助［雷蔵］／佐野領域［デンタク］／奥村浩［カネダ］／上野仁［ヤコブ］／石川成俊［ニコ］／大橋二郎［ダフ］／浜里堅太郎［トバ］／萩尾なおみ［女教師］／丸尾末広［中年男］

スタッフ――――作・K.TAGANE／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋鳥羽テック／美術・飴屋法水／衣装・矢車剣之助／小道具・佐野領域＋森實仁美／SFX・松井祐一／照明・瀬戸光信（龍前照明）／演助・岡野昌代＋大橋二郎／協力・"Y"／CO-STAFFF・小柴比呂子＋佐藤千里＋佐藤珠子＋関場理華＋湯原K子＋小松節子＋渕岡康子＋神保京子／宣伝美術・丸尾末広＋飴屋法水

■1985.11.26　越美晴リサイタル「Boy Soprano」［草月ホール］サポート





★4

だからライチの実を人造人間の燃料にすることにしたんだ。植物を燃料にするテクノロジーってのが何かイイと思った



★5

★RETURN OF LITCHI HIKARI CLUB
[東京グランギニョル]

公演名――RETURN OF LITCHI HIKARI CLUB
公演日程――1986.3.27～4.2
公演場所――都立家政スーパーロフトKIND
キャパシティ――200人
公演回数――7回
観客動員数――1900人
チケット――2,000円（前売り／1,800円）

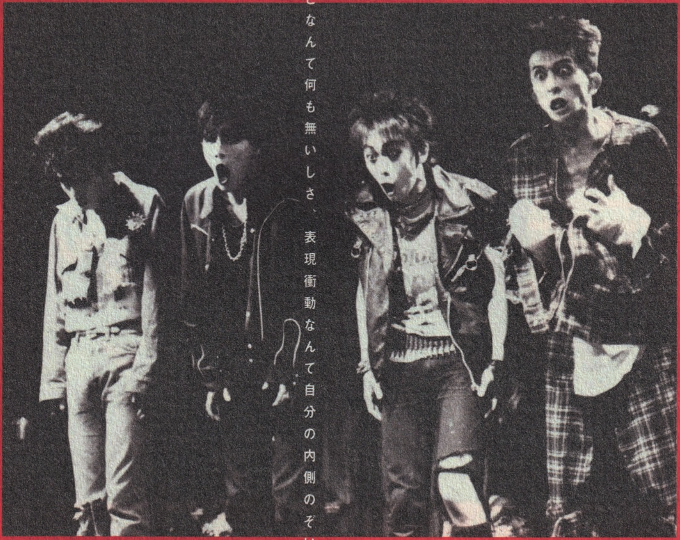
出演――常川博行［ゼラ］／嶋田久作［ライチ］／越美晴［マリン］／飴屋法水［ジャイボ］／武井龍秀［タミヤ］／矢車剣之助［雷蔵］／佐野領域［デンタク］／奥村浩［カネダ］／上野仁［ヤコブ］／石川成俊［ニコ］／大橋二郎［ダフ］／今泉浩一＋浜里堅太郎［トバ］／萩尾なおみ［女教師］／丸尾末広［中年男］

スタッフ――作・K.TAGANE／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋鳥羽テック／舞台美術・飴屋法水／衣装・矢車剣之助／小道具・佐野領域／SFX・松井祐一／照明・瀬戸光信＋龍前照明／舞台監督・奥村浩／制作・岡野昌代＋湯原K子／CO-STAFFF・小紫比呂子＋佐藤珠子＋渕岡康子＋土方建三＋石川健／宣伝美術・丸尾末広＋飴屋法水

LITCHI HIKARI CLUB+++

上★右からヨーカン（上野仁）、ナル（石川成俊）、
ヒジカタ（土方歳三）、イシカワ（石川健）。
下★ヨーカン（上野仁）。

別に言いたいことなんて何も無いしさ、表現衝動なんて自分の内側のぞいても、何にもでてこないしさ





ワルプルギス

1986.10.3〜16［東京グランギニョル］

「ワルプルギス」というタイトルと吸血鬼ものというモチーフは、「ライチ」の上演の際、東京に実在するワルプルギスというクラブの店員が「こんど吸血鬼の話をやって下さい」と、アンケートに書き込んだことから決定された。

■

「いいかげんなようだけど……イヤ、実際いいかげんなんだけど、そもそも別に言いたいことなんて何も無いしさ、表現衝動なんて自分の内側のぞいても、何にもでてこないしさ。外からくるものにさ、自分がどうリアクションしたかって結果の集積だけが、しいて言えば自分というものなのかなあ。」

■

この作品では飴屋は舞台美術をやめ、三上晴子氏に舞台美術を依頼する。それまでジャンクや機械を舞台上にあげながらも、あくまでも舞台美術の範疇であったのに対し、三上は総てを、例えばNTTの廃棄電話ケーブルなど、現実の産業廃棄物で構成。そのリアリティは強烈であったが、それが劇場という場や、芝居のストーリーの中では、じゅうぶんに生かされていたとは言えなかった。

■

また、舞台美術の場合にはシーンが変わり、暗転になり10秒でセッティングというような制約があるが、美術家である三上にはそうした了解事項が最初からあるはずもなく、後の「バリカーデ」にまで繋がる、演出家飴屋と、美術家三上晴子の激しい葛藤が始まった。

■

なお、台本では会場全体は無菌室と設定され、大塚ジェルス・ホールの階段まで全てビニールで覆い無菌室とし、そこにいる少女の群れを包んでしまおうと考えられていた。ここにはクリーンというイメージに対する嫌悪感の芽

WALPURGIS+++

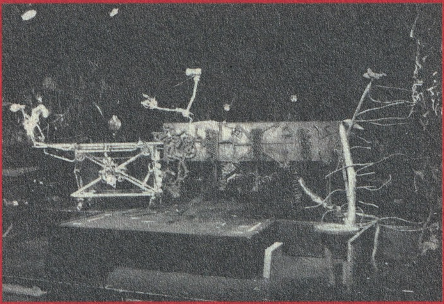
1★ルゴシ役の飴屋法水。
2★ナタ・デ・ココ役の嶋田久作。／P・桑本正士
3★右からタグチ（田口貴朗）、ヨーカン（上野仁）、以下省略。／P・桑本正士
4★リタ役の矢車剣之助。／P・YUKIKO INOUE
5★三上晴子製作のストレーッチャーと心臓のオブジェ、鉄製の棺桶など。
6★三上晴子製作の心臓のオブジェ。

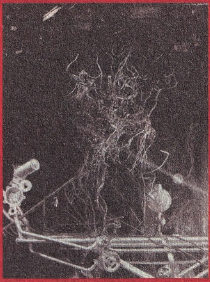












生えがあり、この無菌室のイメージは後に三上晴子による実際のスーパー・クリーンルームを使ったインスタレーションに繋がったのかもしれない。

■

前回がフランケンシュタインものであったことを考えると、引き続き古典的なモチーフと言えるが、飴屋が当時意識していたのは、同じく古典的なゾンビを扱いながらも、人間とか演技とかに対して画期的なスタンスを取りえていたと思えるスプラッター映画、サム・ライミ監督の「死霊のはらわた2」であった。

■

この「ワルプルギス」では飴屋が自ら台本を書いたが、あいかわらず巻き舌江戸っ子弁の武井龍秀を主役の吸血鬼にすえ、何をやっても死なない吸血鬼たちが、笑いながら自分の脳ミソをワリバシでかきまぜ、ウジがわいた口でベラベラしゃべり、骨折した腕をグルグルふりまわすシーン、知能指数ゼロの殺人鬼ゲシュタポの登場、ユーロビートに合わせて血が噴水のように吹き上がり続けるエンディングなどに、飴屋の主な狙いはあったようだ。

■

あいかわらず入場制限をする程の観客動員であったが、それまでのタガネと飴屋の緊張関係がもたらした微妙なバランスから、飴屋のみの資質に大きく偏った変化に対し……反応は賛否両論といった感じであった。

■

また、公演終了後、某雑誌の劇評担当者から、写真を編集部までもってこいと横柄な要求をされたあげくに商業的うんぬんと芝居をケナされ、憤りを覚え、こんなバカがのさばる演劇界や、こんなバカに原稿書かせてるマスコミにも嫌気がさす。

■

「イヤあ、その劇評家や編集者が無料で働いてるんなら別だけど、自分の経済行為が何によって成りたってるかの自覚が無いわけじゃん。広告に大きく依存しながらの雑誌収入から自分の賃金頂くために紙面つくってんのに、批判したい対象に写真もってこさせる甘え。それは只のバカでしょ。商業的などと批判するなら自費出版してみろ。電車賃と手間賃出せ、バカ、と。」

■

さて、そんな憤りもあったからなのか、プライベートもふくめタガネ氏が飴屋から離れることとなったからなのか、三上晴子と出会い、劇場での舞台表現に限界を感じたからなのか……ここまで4作品を作って急成長した東京グランギニョルを、飴屋は、突然、解散させる。

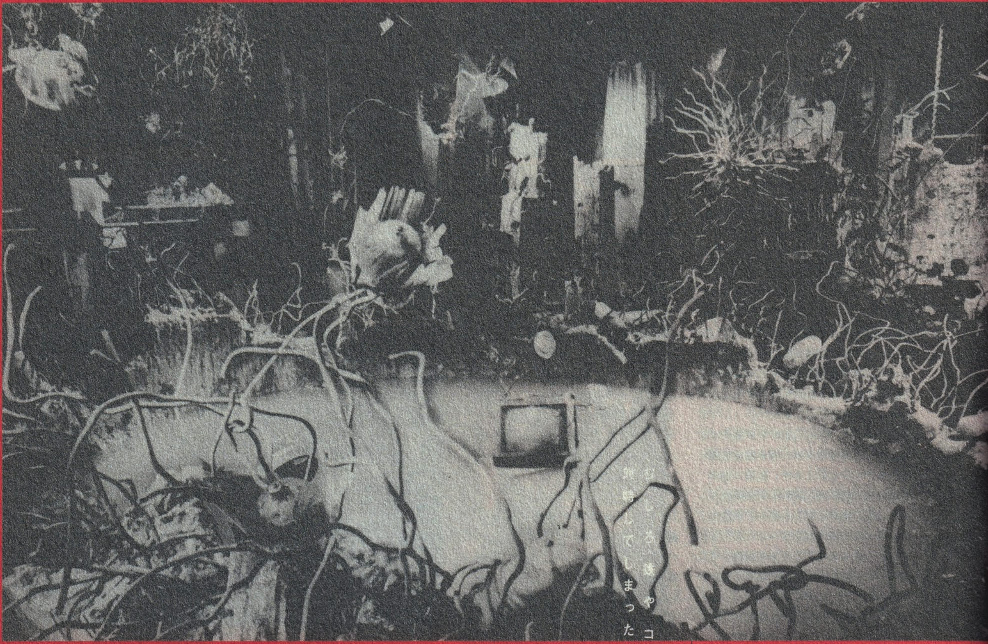
★ワルプルギス［東京グランギニョル］

公演名――ワルプルギス
公演日程――1986.10.3〜16
公演場所――大塚ジェルスホール
キャパシティ――80人
公演回数――14回
観客動員数――3500人
チケット――2,000円（前売り／1,800円）

出演――武井龍秀［ワルプル］／石川成俊［ナル］／上野仁［ヨーカン］／嶋田久作［ナタ・デ・ココ］／矢車剣之助［リタ］／大橋二郎［ゲシュタポ］／越美晴［ワーミー］／棚橋ナッツ［ワーミーの兄］／飴屋法水［ルゴシ］／奥村浩［チョウ・イーツェン］／今泉浩一［チョウの下男］／田口貴朗［タグチ］／浜里健太郎［ハマサト］／土方歳三［ヒジカタ］／石川健［イシカワ］／吉川基子［バイオリンの少女］

スタッフ――演出・飴屋法水／脚本・飴屋法水／音響・飴屋法水＋青木みどり／衣装・矢車剣之助／美術・三上晴子／照明・瀬戸光信（籠前照明）／宣伝美術・丸尾末広＋ミルキィ・イソベ／制作・小柴比呂子＋神尾滋子

■1987.4.[illegible]〜17 越美晴リサイタル「echo de MIHARU」［渋谷・パルコ］サポート



★1

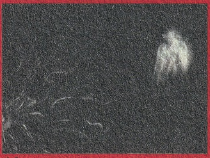
むしろ鉄やコンクリートや機械に、その柔らかな身体が
埋没してしまった時のリアリティ……



★2



★4



★3

1★三上晴子、飴屋法水による舞台美術。／P・猪瀬光
2★右から部下2（土方歳三）、部下1（浜里賢太郎）、部下（石川健）に責められるサイトウ（斎藤聡介）。／P・HANAE YASHIRODA
3★タグチ役の田口責朗。
4★ウロキ役の石川成俊。
5★サイトウ役の斎藤聡介とウロキ役の石川成俊。



★チラシ

★バリカーデ BARRIKADE
[飴屋法水×三上晴子プロジェクト]

公演名――――バリカーデ BARRIKADE
公演日程――――1987.11.7〜14
11.17〜23
公演場所――――ATELIER RAMDE SCOP
キャパシティ――200人
公演回数――――15回
観客動員数―――3500人
チケット――――2,500円（前売り2,200円）

出演――――石川成俊［ウロキ］／上野仁［ウエノ］／常川博行［会社員］／嶋田久作［シマダ］／武井龍秀［タケイ］／大橋二郎［オオハシ］／棚橋ナッツ［タナハシ］／斎藤聡介［サイトウ］／田口責朗［タグチ］／今泉浩一［イマイズミ］／浜里賢太郎［部下1］／土方歳三［部下2］／伊藤雄春［部下3］／石川建［部下4］

スタッフ――――演出・飴屋法水＋三上晴子／脚本・飴屋法水＋三上晴子／音響・飴屋法水＋青木みどり／音響操作・押田千恵子＋青木みどり／衣装・田口責朗／美術・三上晴子＋飴屋法水／照明・鈴木浩／照明操作・岡野昌代／宣伝美術・飴屋法水＋三上晴子／企画・製作・飴屋法水＋三上晴子／制作助手・今泉浩一＋湯山玲子／総合助手・吉川基子＋浅田應子＋條原夕子＋狩野優＋箱崎由美／音響機材協力・KENWOOD CLUB K

■1987.8.28〜9.9　三上晴子「有機室」［池袋・西武百貨店］／音楽担当・飴屋法水

バリカーデ

1987.11.7〜14　17〜23［AMEYA+MIKAMIプロジェクト］

それが演劇なのかはともかく、「ワルプルギス」で仕事をした三上晴子と共同で何かをしたいと考えていた飴屋は、三上とともに大崎の工場跡をアトリエとして住みはじめる。飴屋も溶接を覚え、目的もなく二人で鉄のオブジェを製作する日々。この時期、二人はプライベートでもパートナーとなった。

■

おりしも廃墟、デッドテック、ジャンクといったことがさかんに語られている最中に、廃墟的な工場跡に産業廃棄物に囲まれてスクワッターのようにして暮し始めたことから、サイバーパンクの思想的な中心人物ブルース・スターリングが来日した際、アトリエを訪れ、「ここごそサイバーパンクな場所だ」と語る。また、当時行われた、いとうせいこう氏との対談、「東京サイバーキッズ」(「WAVE」19)でも、この頃の様子はリアルに語られている。

■

「たまたまね、何かそういう場所の隅を借りられたんだ。廃工場を取り壊す前の、税金対策みたいなことだったんだろうね。15坪の契約でさ、でも300坪くらい勝手に使えたんだよ。只、居住区じゃないから住むのはダメでさ、こっそり住んでたんだ。

夜、防犯赤外線センサーの下を這って出入りしてさ。女子トイレの便器とっぱらって、コンクリ流して、そこに隠れて住んでたんだ。裏にプロパンとコンクリで風呂もつくってね。」

■

オブジェを並べて眺めてるうちに、そのまま、ここで芝居をやってみたいと思いはじめ、三上との共同プロデュースという形で「バリカーデ」を企画。

■

三上のオブジェを充分に意識した上で、舞台装置のベース構成を飴屋が担当。東京グランギニョル解散後も、飴屋と舞台をやりたいと望んでいた役者たちが集められ、稽古より、まず、そのベースの舞台づくりを始めた。

■

鉄のジャンクは、三上が「滅ビノ新造型」の時に見つけたという、有明の鉄の解体場から。また群馬にあった医療器具のジャンク屋などからも廃棄物を採集。その量はおよそ30トンにもおよんだ。

■

そこから約半年間かけ、廃工場内に、舞台が造られていった。

■

中央に、爆発の痕を思わせるクレーターのような池があり、そのまわりに、まるでカビの胞子か粘菌のような三上の鉄のオブジェ、さらに神経系統をそのままビジュアル化したようなケーブルを使った三上のオブジェが配置された。

■

共同で設定されたストーリーによれば、そこは廃棄物から再生産されるドラッグの農場であり、そこで生産された金属性のドラッグを投与すると全身の水分が抜け、脳がドライフルーツの様になるという。このあたりは、70年代的なドラッグ・カルチャーを、肉体に発生する化学反応を利用した個の拡張実験として再評価すべきではないかという、当時の両者に共通のコンセプトによるようだ。

■

公演は、消防法の問題から、演劇ではなく美術展という形式で許可を得、11月の寒い中、行われた。廃工場の隅の15坪を貸したはずが、いつのまにか取り壊し不可能な舞台装置を造られ、公演までされた大家さんは、しかし、こころよく見なかったことにしてくれたという。

■

「いや、大家さんたって、その人の持ち物じゃなくて、その人は会社の不動産を貸す只の担当者。だから始末書かくって言ってたよ。個人でリスクはってくれたんだ。これがホントのメセナだな、と思ったね。」

■

しかし、その公演は、演劇と美術のコラボレーションというには、あまりに両者のアイディンティティーを崩し合うものであった。寒い中、毎日トロッコに縛り付けられ池に放り込まれる石川成俊は円形脱毛症になり、斎藤聡介は腕を骨折し、棚橋ナッツも舞台上で頭を切るなど、鉄とコンクリートと水の舞台を走りまわされる役者は、心身共にボロボロであった。

■

「でも、それがリアリティだと思ったのね。ワルプルギスの時、劇場に鉄、持ち込んだけどさ、ストーリーの背景になっちゃったら、それは東急ハンズで買ったパイプにスプレーしたのとそんなに違わないんだよ。マンガで描いた鉄ともね。生身の役者たちにできるのは、むしろ鉄やコンクリートや機械に、その柔らかな身体が対峙してしまった時のリアリティ……演技じゃなく、表現でもなく、僕はそればかり見たがってたんだ。」

■

しかし、飴屋も自覚していたように、それは生身の体を投じた何かではあったが、演劇表現、演技や役者の創造性とは無縁のものであった。演じることの快楽がそこにあろうはずもなく、再演を申し出た飴屋に賛同する役者は一人もいなかった。

■

ちなみに、飴屋が自主的に企画・製作したのは、この公演が最後である。

■

「バリカーデ」の集団は、公演後まもなく消滅。

■

三上晴子は、ロバート・ロンゴに呼ばれ、再び美術家としての作業に専念するためニューヨーク移住。飴屋とのプライベートな関係もそこで終わる。

■

「ニューヨークに行った晴子ちゃんにね、籍入れようぜって、国際電話で話したんだ。このまま一生会わずに籍入れないかって。互いの肉体は接触しない。でも電話の向こうに妻はいて、戸籍謄本上にも妻がいる……。これがバーチャル・リアリティっていうやつだろ？とか言って。断られたけど(笑)。」

■

この冗談めいた体験をもとに、コンドームをしたセックス、交換のない交歓、個の免疫を守るコンドーム……をモチーフにした次作「スキン」が着想され、また、後のパブリックザーメン(公衆精子計画)や、血液交換計画、夫婦交換計画などに繋がっていく。



★5

BARRIKADE+++

■1989.7.22 東宝映画「ガンヘッド」(原田眞人監督)のバイオロイドのデザインを三上晴子とともに手掛ける

M.M.M.結成

「フールズメイト」の創設者でもある、YBO²の北村昌士氏からインクスティック芝浦でのYBO²のライヴのサポートを依頼され、快く引き受けるが、集団はすでに無かった。

■

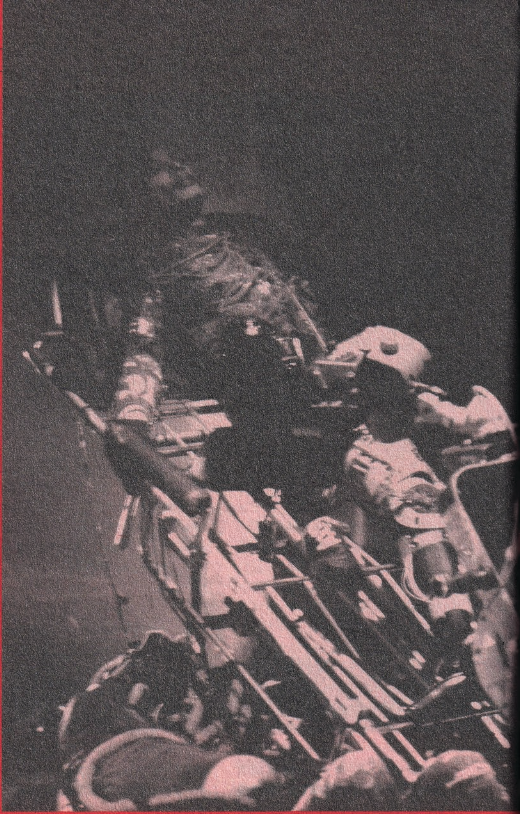
しかし、ライブの3日前に観たスタンリー・キューブリック監督の「フルメタル・ジャケット」のエンディングでミッキーマウスの歌を唄うシーンが気に入り、YBO²の「アメリカ」という曲のイントロにも同じくミッキーマウスが使われていたことから、着ぐるみのミッキーが踊る「ミッキーマウスショー」を即席で発案。すぐさま衣装の田口貴朗に着ぐるみを発注。「バリカーデ」以降離れていった役者たちを、まあまあ一晩だけと召集。

■

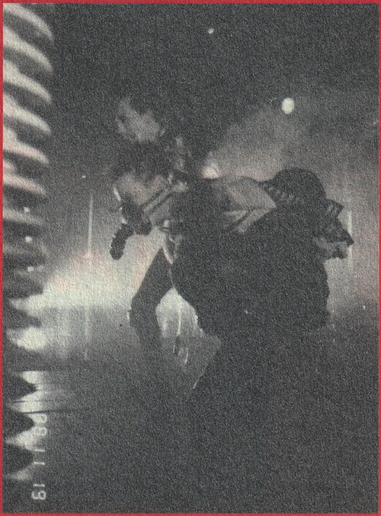
現場では音が出ないトラブルから結果はボロボロだったが、飴屋はこの着ぐるみショーをいたく気に入り、それは後に「ドナドナ」に繋がることとなる。そして、この時声をかけ、再び飴屋と作業をする気になった棚橋ナッツ、斎藤聡介、大橋二郎、田口貴朗、浜里堅太郎が母体になり次のM.M.M.結成に繋がっていく。

■

「役者の顔が一人も出ないパフォーマンスは始めてだったからね。ウルトラマンの着ぐるみショーなんかでも、観客は何を見てるんだろうなって。ウルトラマン？　じゃないことは皆知ってるし……役者？　の顔は見えないし。中身が誰かもわからないし。こりゃ子供のくせに、かなり高度なコミュニケーションしてるんだなあって。TVの世界を初歩的なバーチャル・リアリティとみなせば、そのTVの世界を無理やり目の前の現実に落とし込む着ぐるみショーってのは、いわば、リアル・バーチャリティだよね。」



★1



★2



★3

1★ストレッチャーの上のホセ（斎藤聡介）。
2★ホセ役の斎藤聡介（後）とドロシー役の大橋二郎。
3★ドロシー役の大橋二郎。／P・NAOMI KAWAKAMI
4★多用されたスライド
5★大学教授シマダ役の嶋田久作。
／P・NAOMI KAWAKAMI

SKIN#1 DEPART MIX+++

■1988.3　YBO コンサート［インクスティック芝浦］着ぐるみパフォーマンス

★4



無菌室の中でなければ生きていけないネズミ、ヌードマウス……コンドームなしではエイズから身を守れない人間

SKIN#1 DEPART・MIX

1988.11.11〜20 [M.M.M.]

YBOのサポートが終わった直後、PARCO劇場のプロデューサー立石和浩氏から舞台のオファーが舞い込む。しかし基盤となる集団が無いため、「ミッキーマウスショー」のメンバーを軸に、グランギニョル以降、飴屋から離れていた佐野領域を「戻ってきたら主役だよ？」と呼び寄せる。しかし、「バリカーデ」以降、自身が突っ走ることに不安を覚えた飴屋は民主的な集団を目指し、集団名も全員で協議され、M.M.M.となった。

■

当初の「スキン」のオープニング予定は、東京ディズニーランドで流れている（キューブリック監督の「バリー・リンドン」でも使用）イギリスの古典楽曲にのり巨大なコンドームのようなヌードマウスの着ぐるみを着た役者がいもむしのように行進するというものだった。（後に変更）

■

「科学雑誌で見た、免疫不全のため無菌室の中でなければ生きていけないネズミ、ヌードマウス……コンドーム（スキン）なしではエイズから身を守れない人間……エイズ以前に避妊や中絶に依存しながら快楽を立ち上げる人間……コンドームを被った男性器……着ぐるみを被った身体……人間の身体上の境界線である皮膚（スキン）……スキンレス・スキン（皮膚なし皮膚）という名のコンドーム……まあ、こういうダジャレ的連鎖から始まったんだよ。」

■

飴屋は、バイオテクノロジーの研究者である大学教授が突然死し、その息子に届けられた骨壷を開けると、中には、「科学と学習」というタイトルの白いフロッピーディスクが入っていた……というところまで25ページ分を一気に書き上げると、「大橋、そういうことだ。科学と学習だ。じゃ、後は頼むぞ。」といって台本を大橋二郎に委ねた。

■

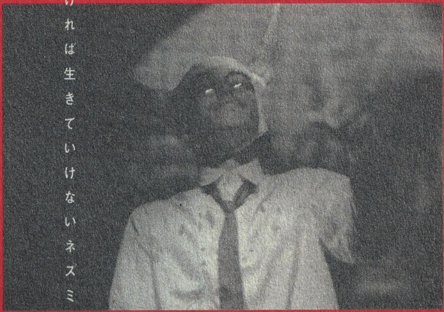
廃墟的な工場跡の「バリカーデ」の会場から一転し、PARCOという劇場然とした場所に変わったため、舞台装置は直接的なリアリティよりも、着ぐるみのような、舞台ならではの抽象と具象のバランスを生かした書割的なものにすべく、ならばいっそ模型で行こうと考えられた。また、この舞台から様々な映像をスクリーンにスライドで映し出す抽象的なアプローチもなされ、これは飴屋にとって新境地となった。

■

この公演では大きなトラブルは無かったようだが、公演終了後、PARCO劇場の立石和浩氏はプロデューサー業を離れる。興行は当然の商業行為と肯定していても、マスコミに対し取材や掲載のお願いなどはしたことのなかった飴屋には、そういう制作サイドとの様々な軋轢があったようだ。

■

なお、この舞台の後半、痴呆症のようになり、只、微笑みながら手をふるだけの嶋田久作の存在には、あきらかに昭和天皇がだぶっており、後に、ダッチライフ・シリーズから2000年の「日本ゼロ年」展まで繋がる、天皇ヒロヒトへの強い興味がここから始まる。彼は「飴屋にとっての日本」の、まさに象徴であった。



★5

★SKIN#1 DEPART・MIX [M.M.M.]

公演名	SKIN DEPART・MIX
公演日程	1988.11.11〜20
公演場所	PARCO SPACE PART3
キャパシティ	250人
公演回数	14回（マチネあり）
観客動員数	4200人
チケット	3,000円

出演——嶋田久作［大学教授シマダ］／飴屋法水［教授の友人テン］／佐野領域［シマダの息子リカ］／上野仁［リカの友人ボブ］／石川成俊［リカの友人ルー］／棚橋ナッツ［リカの友人ネンド］／有田睦［リカの友人ヨハネ］／斎藤聡介［ホセ］／大橋二郎［ドロシー］／伊藤雄春［助手1］／山道晃［助手2］／近野正人［テンの助手］

スタッフ——演出・飴屋《劇王》法水／脚本・飴屋法水＋大橋二郎／音響・飴屋法水＋浜里堅太郎＋山道"Y"晃／衣装・田口貴朗／美術・飴屋法水＋M.M.M.／宣伝美術・上野仁／製作・増田通二／制作・立石和浩＋小巻健司／企画・制作・PARCO＋M.M.M.

★チラシ



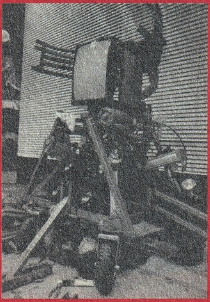
■1989.1.7 [illegible]

SKIN#2 バッファロー・MIX

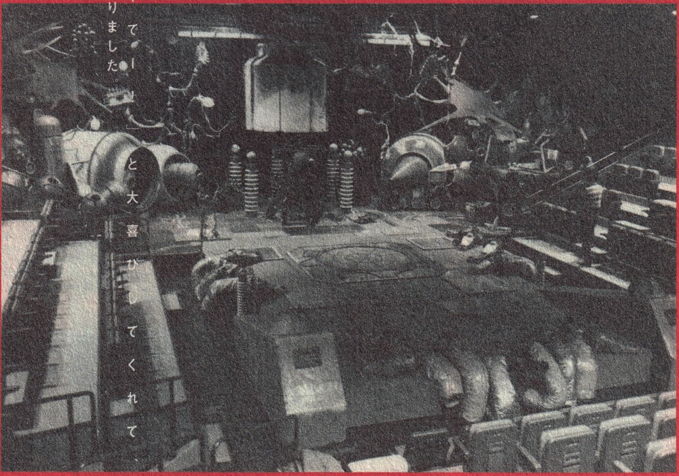
1989.4.16〜18 [M.M.M.]

「こりゃ、ドッキリもんやでー！」と大喜びしてくれて、なんか大阪独特の直接的な感じが好きになりました。

★1



★2



PARCOの後、すぐに「スキン」の再演を、バンダイの芳根聡プロデューサーから依頼される。しかし、嶋田久作氏のスケジュールが合わず、嶋田氏は代役をたてた方がいいという意見だったが、飴屋は他の誰もイメージ出来ず、それなら機械に代役させると、シマダマシンの製作を決定。佐野領域と石川成俊の二人が製作に専念、空圧シリンダーで動く、シマダマシンが生まれた。

■

またそこに搭載されたモニター内の嶋田氏のセリフや演技は、ビデオアーティスト島野義孝氏により、嶋田氏の母音と子音の発音パターン映像を細かく繋ぎ合わせて製作された。

■

マシンといえばマーク・ポーリン率いるSRLのマシンなどを思い浮かべるが、SRLのヴィデオに「MMM」というタイトルのものがあるのも奇遇だ。

■

「スキン」の再演は大阪公演からスタート。

■

大阪の宿泊場所の押入を開けると、偶然ミッキーのぬいぐるみが入っており、「おおー、これは幸先いい！」と飴屋はミッキーといっしょに寝たが、大阪の劇場関係者には、東京からわざわざ4トントラック2台にゴミを積んで持ってきて、いつまでたっても稽古しないでゴミをごちょごちょやってるキタナイ集団にしか見えなかったらしい。

■

ところが、ようやくマシンが完成し、マシンがバンッ！と動いた瞬間に、「こりゃ、ドッキリもんやでー！」と大喜びしてくれ、以降、関係はスムーズになったという。

■

「客席が揺れるぐらい大きな低音が欲しいって頼んだら、よっしゃ、まかしときっ！って客席の真下に巨大なスーパーウーハー仕込んで本当に客席振動させるし（笑）、お客さんも何がそんなに面白いのか思うほどよく笑うし、いやーこん時以来、なんか大阪独特の直接的な感じが好きになりました。」

1★嶋田久作が出演できなかったため、シマダマシンとなって登場。
2★大阪・近鉄アート館での「SKIN #2 BUFFALO・MIX」の舞台設営。

★SKIN#2 BUFFALO・MIX [M.M.M.]

公演名――SKIN#2 BUFFALO・MIX
公演日程――1989.4.16〜18
公演場所――大阪・近鉄アート館
キャパシティ――250人
公演回数――4回
観客動員数――1600人
チケット――3,000円

出演――嶋田久作［大学教授シマダ］／飴屋法水［教授の友人テン］／佐野領域［シマダの息子リカ］／上野仁［リカの友人ボブ］／石川成俊［リカの友人ルー］／棚橋ナッツ［リカの友人ネンド］／有田睦［リカの友人ヨハネ］／斎藤聡介［ホセ］／大橋二郎［ドロシー］／伊藤雄春［助手1］／山邉晃［助手2］／近野正人［助手3］

スタッフ――作・飴屋法水＋大橋二郎／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋浜里堅太郎／衣装・田口賀朗／セット制作・棚橋ナッツ＋伊藤雄春＋山邉晃／マシン制作・佐野領域＋石川成俊／ポスター制作・飴屋法水＋上野仁／スライド制作・大橋二郎＋斎藤聡介／ヴィデオ制作・島野孝義／照明・倉本泰史／協力・埋橋真理／制作・田中豪（M.M.M.）

SKIN#2 BUFFALO MIX

東京公演は、一転してピリピリした空気に包まれた。プロデューサー・サイドには実は「バリカーデ」の直後から構想があったため、「バリカーデ」のように乱暴に使える倉庫を用意し、仕込みの時間も、興行としては異例の3週間も用意されていたが、PARCOから始まり、台本も装置も普通の劇場を想定して書かれた「スキン」には、その必要がなかった。しかし制作サイドは、用意した場所や時間を無駄にもできず、そこまで用意したプロデュース体制をマスコミに喧伝したため、広すぎる会場を、ややもてあましながら、大急ぎで新しいセットで埋めることとなった。

■

そのためか、ここでの装置はあまり成功してるとは言えず、仕込みに追われ、3週間も期間がありながら通し稽古を1度もしないまま、ぶっつけ本番で開演されたという。

■

「この曖昧な演劇は、曖昧な東京の、246クラブという曖昧な場所で、M.M.M.という曖昧な集団によって、曖昧に上演される。」という246MIXの上演台本の書き出しにも、当時の飴屋の気分が顕わされているだろう。

■

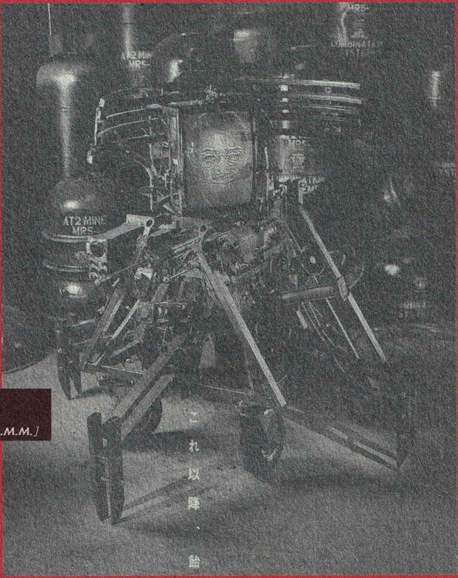
そのような軋轢の中で行われ、決して完成度が高いとはいえないこの公演だが、逆に、そういうプロデューサーと演出家の、ますます巨大化したスクリーンの映像と演劇の、強力なマシンと役者の……互いを侵食しながら存在しあう様が、作品のテーマとなった免疫不全とだぶり、独特の緊張をはらんだ、非常に印象深い公演となった。

■

そしてこの公演が、飴屋にとって、状況劇場以来続けてきた、いわゆる演劇の形をした最後の公演となり、これ以降飴屋は舞台作家としては完全に免疫不全の状態に陥る。

SKIN#3 246・MIX

1989.6.3〜18 [M.M.M.]



★5

これ以降、飴屋は舞台作家としては完全に免疫不全の状態に陥る



★1



★2



★3



★4

1★シンクロ・エナジャイザーのような装置をかけた、シマダの息子リカ役の佐野領域。
2★幻覚シーンの嶋田久作。
3★246での舞台設営。手前に佇んでいるのは石川成俊。
4★「SKIN #3 246・MIX」チラシ
5★マシンとなった大学教授シマダ（嶋田久作）。
／P・HIROSHI NOMURA

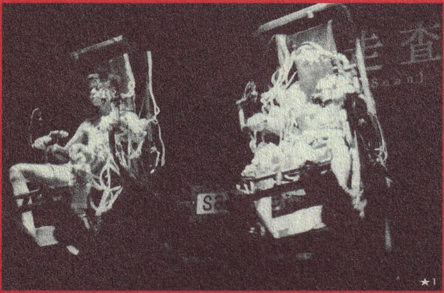
★SKIN#3 246・MIX [M.M.M.]

公演名――SKIN#3 246・MIX
公演日程――1989.6.3〜18
公演場所――青山・246club
キャパシティ――250人
公演回数――16回
観客動員数――5000人
チケット――3,000円

出演――嶋田久作［大学教授シマダ］／飴屋法水［教授の友人テン］／佐野領域［シマダの息子リカ］／上野仁［リカの友人ボブ］／石川成俊［リカの友人ルー］／棚橋ナッツ［リカの友人ネンド］／有田睦［リカの友人ヨハネ］／斎藤聡介［ホセ］／大橋二郎［ドロシー］／伊藤雄春［助手1］／山道晃［助手2］／近野正人［助手3］

スタッフ――作・飴屋法水＋大橋二郎／演出・飴屋《劇王》法水／音響・飴屋法水＋浜里堅太郎／衣装・田口輿朗／セット制作・棚橋ナッツ＋伊藤雄春＋飴屋法水／マシン制作・佐野領域＋石川成俊／ポスター制作・上野仁／スライド制作・大橋二郎＋斎藤聡介／ヴィデオ制作・島野孝義／照明・倉本泰史／協力・埋橋真理／基本設営・草加叔也／制作・芳根聡＋北川亮＋古屋啓子（246club）／田中豪（M.M.M.）／企画・制作・M.M.M.＋246club

SKIN#3 246MIX +++



★1

SKIN#4 POW WOW DUB

1989.9.14 [M.M.M.]

当時、青山のスパイラルホールで毎月行われていたトークショー、「サンヨー・パウワウタイム」へのゲスト出演依頼を嶋田久作氏が受け、その中のパフォーマンス部分の演出を飴屋が依頼されたことから、45分というリミックス・ヴァージョンの「スキン」として、「パウワウ・ダブ」というショーを発案。そこで新しいマシンを造ることとなった。

■

「シマダマシンは、あまりにもSRLに似てたからね……今度は、NASAの宇宙飛行士の訓練用のマシンみたいな、人間が乗り回転する椅子マシンにしたんだ。で、それが高速で回りだすと、身体の中の映像がスクリーンに映し出されて……速度が増すごとに、動物や植物やテクノロジーの様々な映像がシャッフルされるような仕組みで……。」

■

飴屋のイメージに基づき、またも佐野と石川によりマシンは製作された（製作途中、SRLのマーク・ポーリンがアトリエを訪れアドバイスも受けたと言う）が、完成後、まず飴屋自身が乗って確認したところ、目盛りが90を超えたあたりから強烈なGで、顔や頭の毛細血管が切れ、内出血の紫色の斑点が浮かび始めることが判明。最高速度の上限を70と設定。しかしショーの当日、オペレートする飴屋は、本番では自身が体験した90まで上げてしまう。

■

「イヤ、でもなんかそう聞くとヒドイ事みたいに思われちゃうけどさ、そんな死ぬようなモンじゃ無いんだよ。頭の中の毛細血管が少々切れるのはわかったよ。たぶん、そのぶん、少しバカにはなったんじゃないかな。でも、テクノロジーから強烈な快楽を得るのに身体がリスクしょうのは当たり前だし、そのリスクにしたって、人殺す可能性あるのに車運転するのに比べて高いとは思わないよ。もし交通事故が金で解決できるんなら、僕も金で解決すりゃいいんだし……。」

■

飴屋はこのマシンをいたく気に入ったが、やはり、役者からすべての演技も表現も奪い、ただ速度やGに耐えるだけの身体にしてしまう機械と、それを見たがる飴屋の欲望から、再び役者は離れ、集団は瓦解していく。



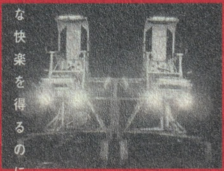
★2

でも、テクノロジーから強烈な快楽を得るのに身体がリスクしょうのは当たり前だし

SKIN#5 VIDEO MIX

JICC出版局からヴィデオを出さないかという話がきたときには「スキン」のコンセプトを使って、独立したヴィデオ作品を10分でも作ればいいということしか考えてなかった。
ある場所に、どれくらいの観客が居て、そこにどれくらいの音圧で音をぶつけたらどういったものが生まれるかということを延々やってきた飴屋にとって、ヴィデオで舞台を再現することは無意味だった。複製芸術に落とし込むには違うアプローチが必要だった。そのためこのビデオバージョンは246での公演を素材に、ビデオアーティスト島野義孝氏に製作を委ね、斎藤聡介と大橋二郎がそれをサポートした。

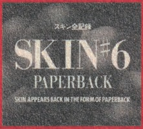




★3

SKIN#6　SKIN PAPERBACK

演劇ぶっく社から、スキンの回顧的写真集、兼、戯曲本を……という依頼があり、飴屋はそれをスキンシリーズのひとつ、紙バージョンということで、カムバック、紙バック、ペーパーバックと、いつものダジャレでタイトルとペーパーバックの造本を決定。この本のために一ヶ月、全員がスケジュールを空けて参加して作ったものが経済的な理由で出版社から却下。その後、編集者、落合星文氏と大ゲンカしながらも、なんとか別バージョンを完成。



1★マシン上の斎藤聡介（ホセ）、大橋二郎（ドロシー）。／P・落合星文
2★右から嶋田久作（大学教授シマダ）、マシン上の斎藤聡介（ホセ）、大橋二郎（ドロシー）。
3★回転するマシン。／P・落合星文

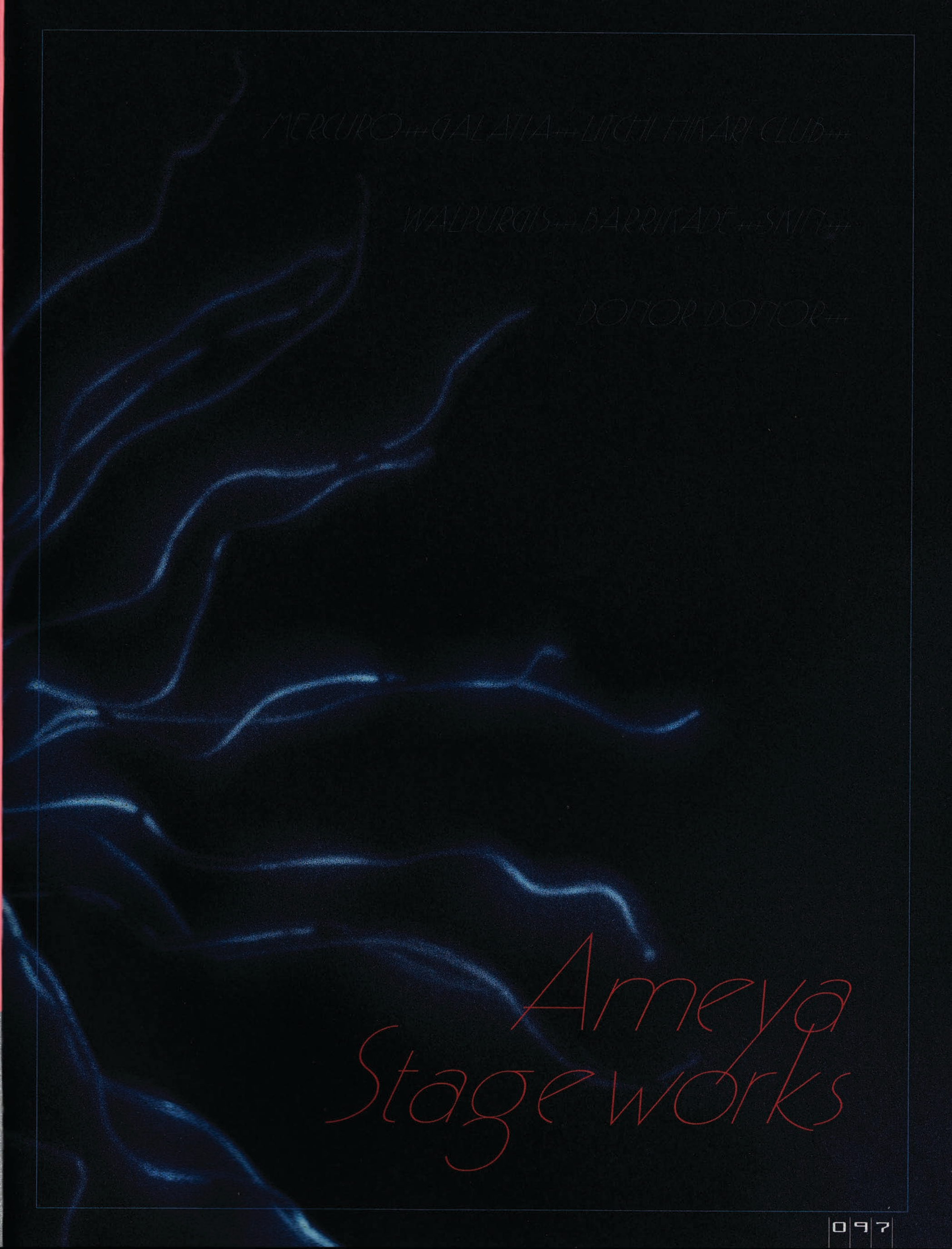
★SKIN#4 POW WOW DUB ［M.M.M.］

公演名――SKIN#4 POW WOW DUB
公演日程――1989.9.14
公演場所――スパイラルホール
キャパシティ――300人
公演回数――1回
観客動員数――350人
チケット――1,000円

出演――嶋田久作［大学教授シマダ］／飴屋法水［教授の友人テン］／佐野領域［シマダの息子リカ］／上野仁［リカの友人ボブ］／石川成俊［リカの友人ルー］／棚橋ナッツ［リカの友人ネンド］／有田陵［リカの友人ヨハネ］／斎藤聡介［ホセ］／大橋二郎［ドロシー］／伊藤雄春［助手1］／山道晃［助手2］／近野正人［テンの助手］

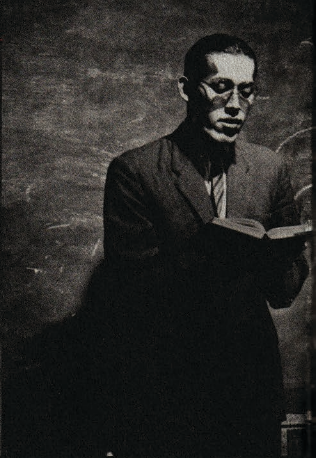
スタッフ――作・飴屋法水＋大橋二郎／演出・飴屋法水／音響・飴屋法水＋浜里堅太郎／衣装・田口貴朗／セット制作・伊藤雄春＋吉田かおり＋渡辺香子／マシン制作・佐野領域＋石川成俊／スライド制作・飴屋法水＋大橋二郎＋棚橋ナッツ＋伊藤雄春＋上野仁／ヴィデオ制作・島野孝義／照明・中山大輔／協力・奥村浩＋今野正人／制作・漆原扶美子（アテイクコンテンポラリー）／ 企画・制作・本木昭子（アテイクコンテンポラリー）

SKIN#4 POW WOW DUB


MERCURO++GALATIA++LICHT HIKARI CLUB++
WALPURGIS++BARRIKADE++SINN++
DOTTOR DOTTOR++
Ameya
Stageworks



★1



★3



MERCURO

マーキュロ ★1984.11.15〜18／1985.2.21〜24［東京グランギニョル］


★2

素人を役者として起用し成立させた東京グランギニョル初作品「マーキュロ」。

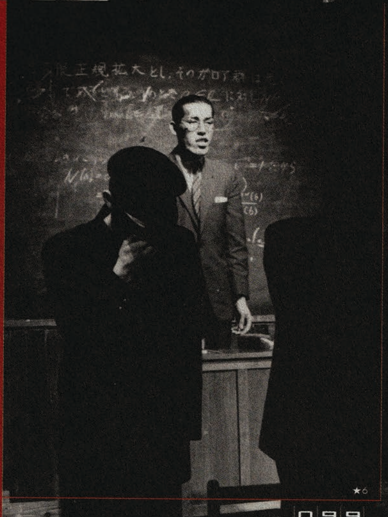

★4


★5

1★ 生徒3（武者小路実政）の腹部からエイリアンが出てくるシーン。ちなみに彼は武者小路実篤の直系だったという。
2★「マーキュロ」が初舞台だった嶋田久作。P・HARUMI AIDA
3★ 生徒1（矢車剣之助）。手に持っているのは資生堂の猫。
4★ 写真雑誌「エンマ」のために撮られたシーン。「マーキュロ」ではエイリアンが出てきたが、ここでは飴屋法水が嶋田の内臓から出現。P・遠藤晴穂
5★「マーキュロ」のオープニングシーン
6★ 教師役の嶋田久作。
7★ 丸尾末広氏によるポスター。



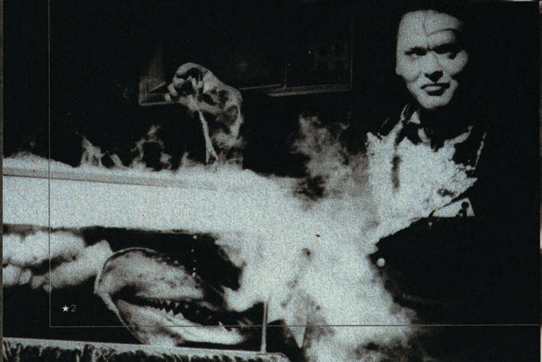
★7


★6

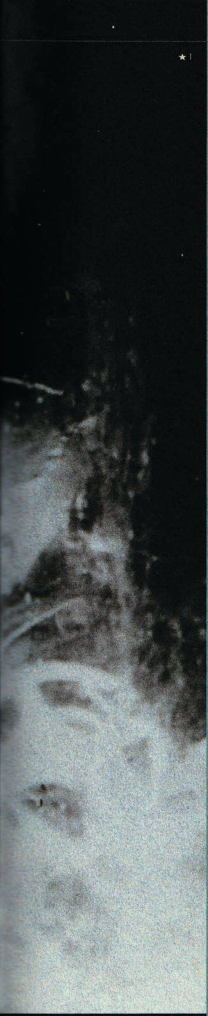


GALATIA

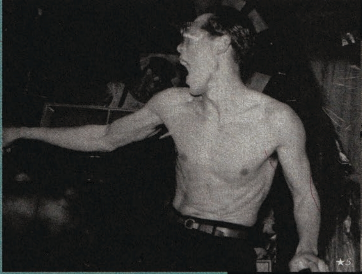
ガラチア ★1985.5.30〜6.4［東京グランギニョル］







★1



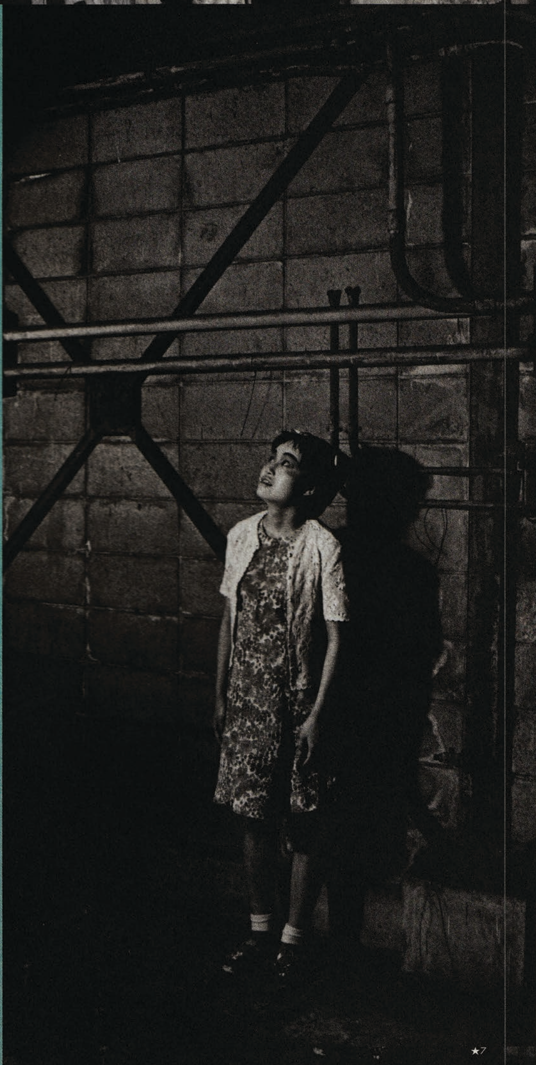
★5



★6

「マーキュロ」再演に続く2作目は、ギニョル版「帝都物語」となった「ガラチア」。

1★ ヘルムート白井博士（嶋田久作）。
P・YUKIKO INOUE
2★ 白井家の執事ペップラー（行谷あたる）。
P・YUKIKO INOUE
3★ ヘルムートの妹ニナ（ももやまてふ）。
P・YUKIKO INOUE
4★ 加藤（矢車剣之助）P・HARUMI AIDA
5★ とにかく踊る嶋田久作。
6★ 左から平田昭彦（Y）、ナウシカ（武井龍秀）、美隣（テクマクマヤコ）。P・YUKIKO INOU
7★ テクマクマヤコ。P・HARUMI AIDA
8★ 丸尾末広氏によるポスター。



★7



★4

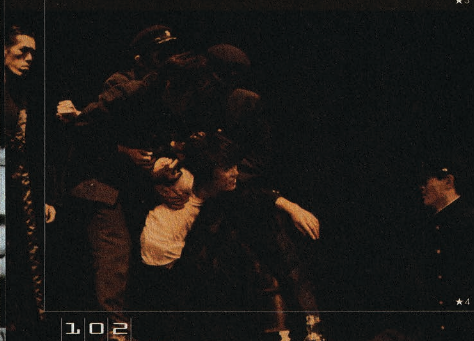


★8

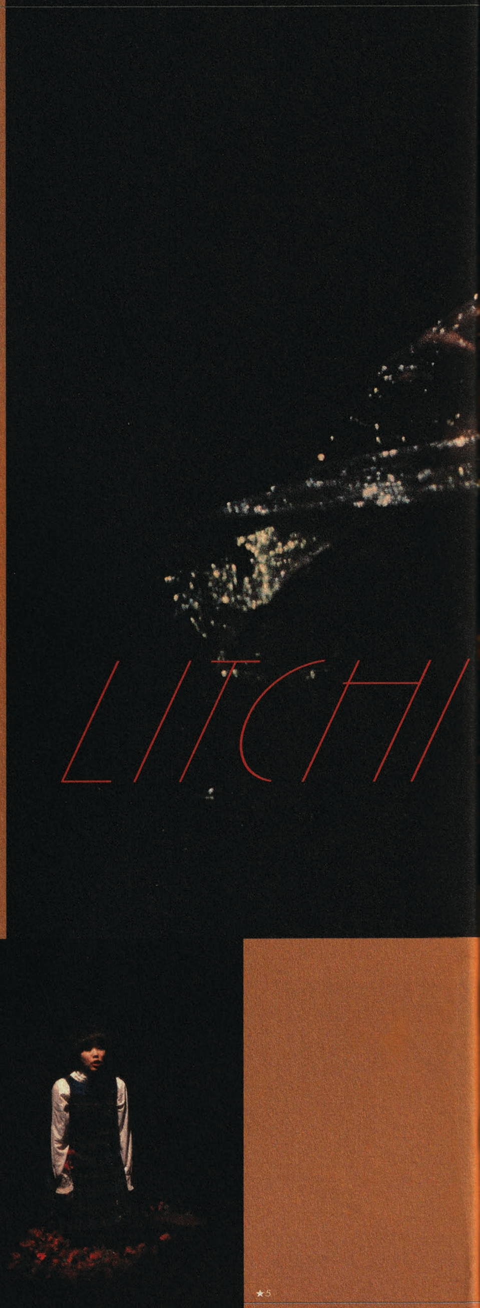

★1


★2


★3


★4

越美晴の参加とともにメンバーも大幅に入れ代わった、第2期グランギニョルによる「ライチ」。



★5



HIKARI CLUB

★1985.12.20〜25／1986.3.27〜4.2 [東京グランギニョル] **ライチ光クラブ**

★6



★7



★8

1★ マリン(越美晴)とライチ(嶋田久作)。
2★ 人造人間を作る学生、左からダフ(大橋二郎)、デンタク(佐野領域)、カネダ(奥村浩)。
3★ ライチ役の嶋田久作。P・YUKIKO INOUE
4★ 嶋田久作(ライチ)、ヤコブ(上野仁)、ニコ(石川成俊)、ダフ(大橋二郎)に捕らえられるタミヤ(武井龍秀)。右はゼラ(常川博行)。
5★ マリン役で東京グランギニョルに初参加の越美晴。
6★ マリン(越美晴)とライチ(嶋田久作)。
7★「ライチ」再演ポスター
8★「ライチ」初演ポスター



★8

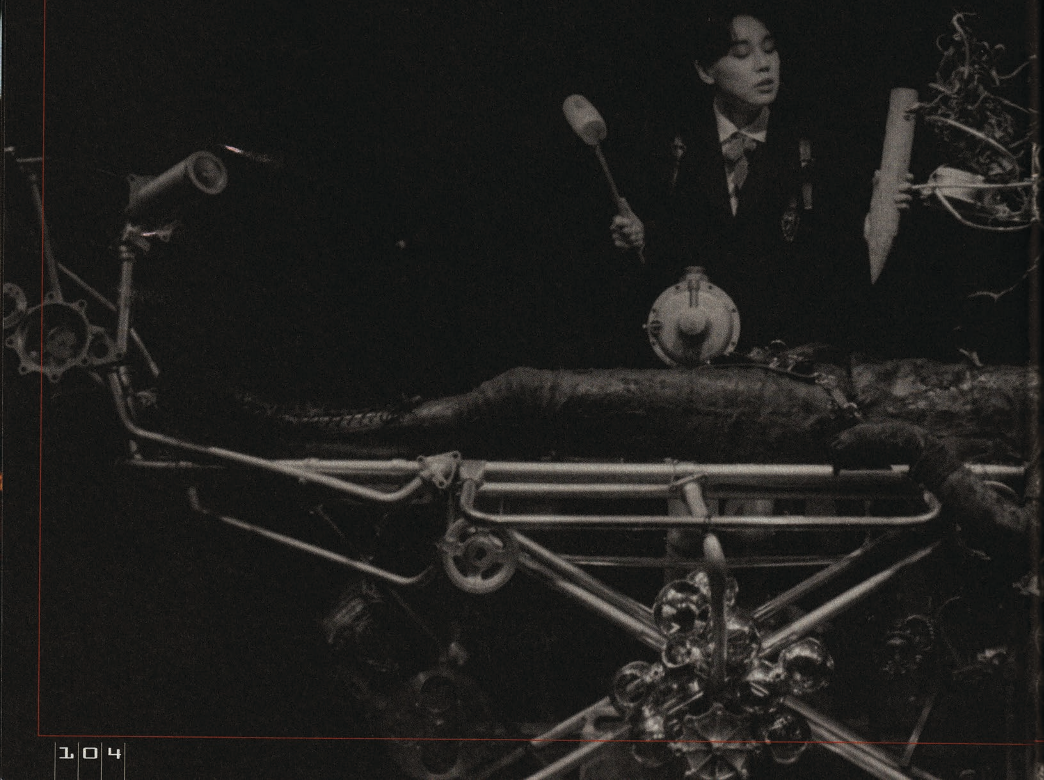
1★ 三上晴子製作の鉄の棺桶。
2★ ゲシュタポ役の大橋二郎の上を這い回るモルモット。
3★ ナタ・デ・ココ役の嶋田久作とチュチュ姿のリタ役、矢車剣之助。
4★ 三上晴子製作の鉄の棺桶から現れるワルプル（武井龍秀）とナタ・デ・ココ（嶋田久作）。
5★ ルゴシ役の飴屋法水とリタ役の矢車剣之助（前）。後ろ右からナタ・デ・ココ（嶋田久作）、チョウ・イーツェン（奥村浩）、ハマサト（浜里堅太郎）。
6★ 右からタグチ（田口貴朗）、ヨーカン（上野仁）、以下省略。P・桑本正士
7★ ワルプル（武井龍秀）に杭を打ち込むワーミー（越美晴）。P・桑本正士
8★ ポスター。



★1.

WALPURGIS

ワルプルギス ★1986.10.3〜16［東京グランギニョル］



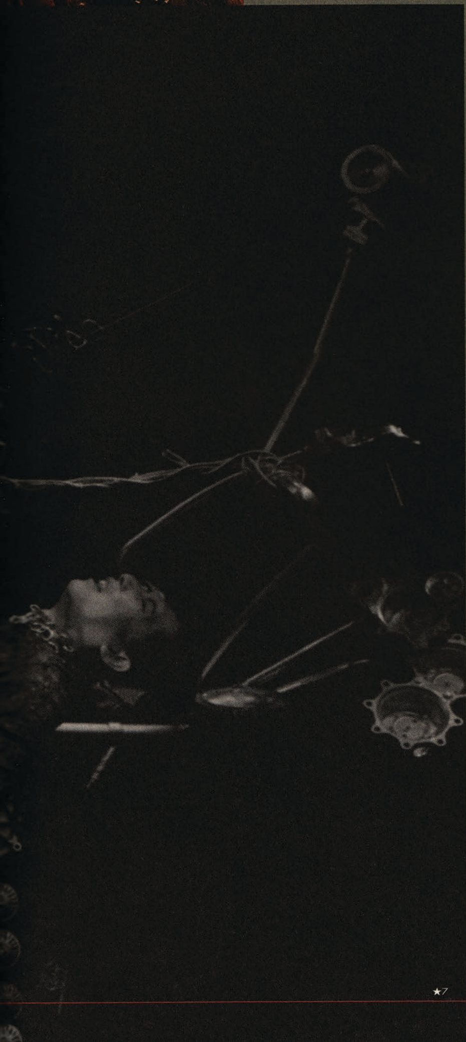
2年間に4作品を上演した、東京グランギニョル最後の公演となった「ワルプルギス」

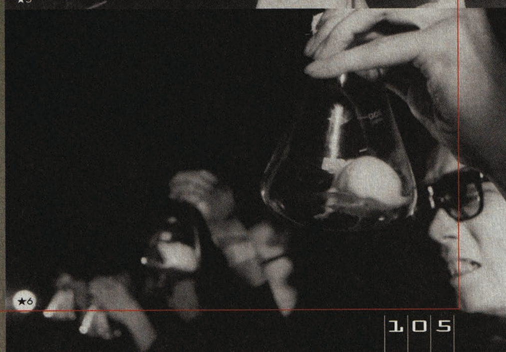

★2


★3


★4


★5


★7

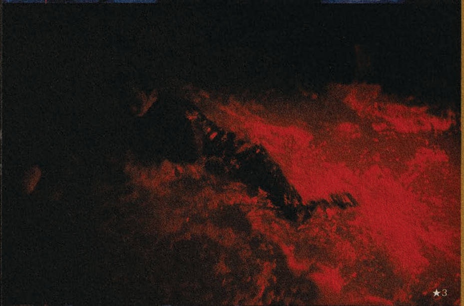

★6

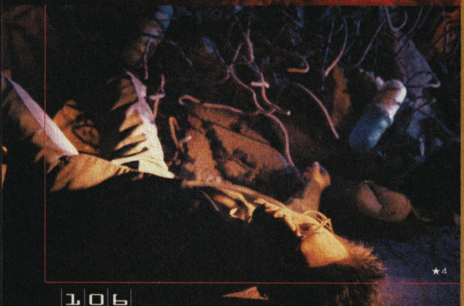
BARRIKADE

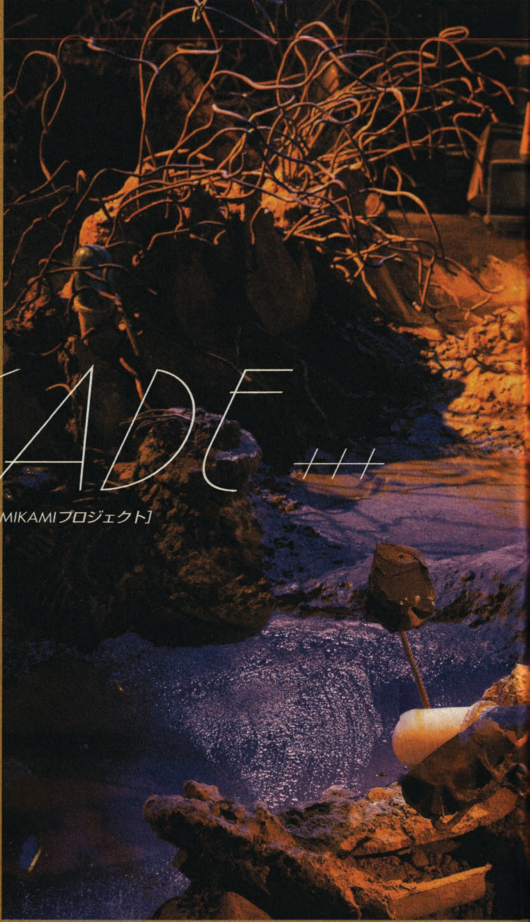
バリカーデ ★1987.11.7〜14 17〜23 [AMEYA+MIKAMIプロジェクト]


★1


★2


★3


★4



1★ 右から会社員(常川博行)、部下(石川建)、サイトウ(斎藤聡介)、部下1(浜里賢太郎)、部下2(土方歳三)。
2★ ウロキ役の石川成俊。
3★ 水の中でずぶぬれのウロキ役の石川成俊。
4★ ウロキ役の石川成俊。
5★ 三上晴子、飴屋法水による舞台美術。
6★ 三上晴子、飴屋法水による舞台美術。
7★ 三上晴子、飴屋法水による舞台美術の一部。P・飴屋法水
8★ サイトウ役の斎藤聡介。
9★ 三上晴子、飴屋法水による舞台美術。P・飴屋法水
10★ ポスター

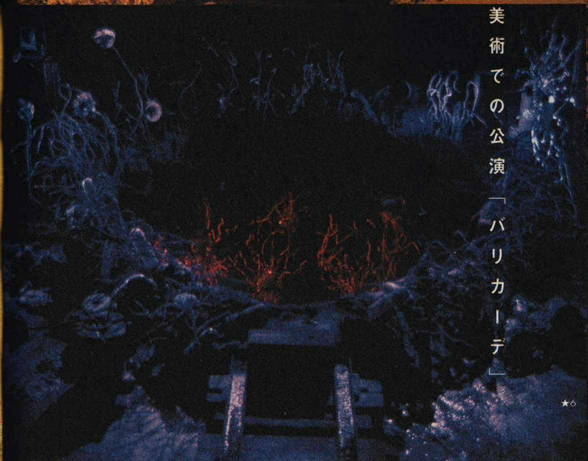


★10

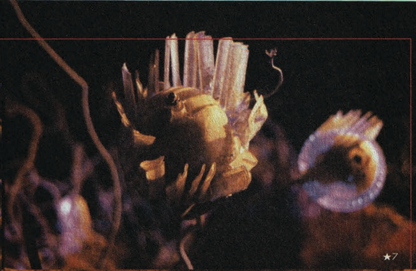
三上晴子、飴屋法水共同企画による、廃工場に造りだされた舞台美術での公演「バリカーデ」



★5



★6



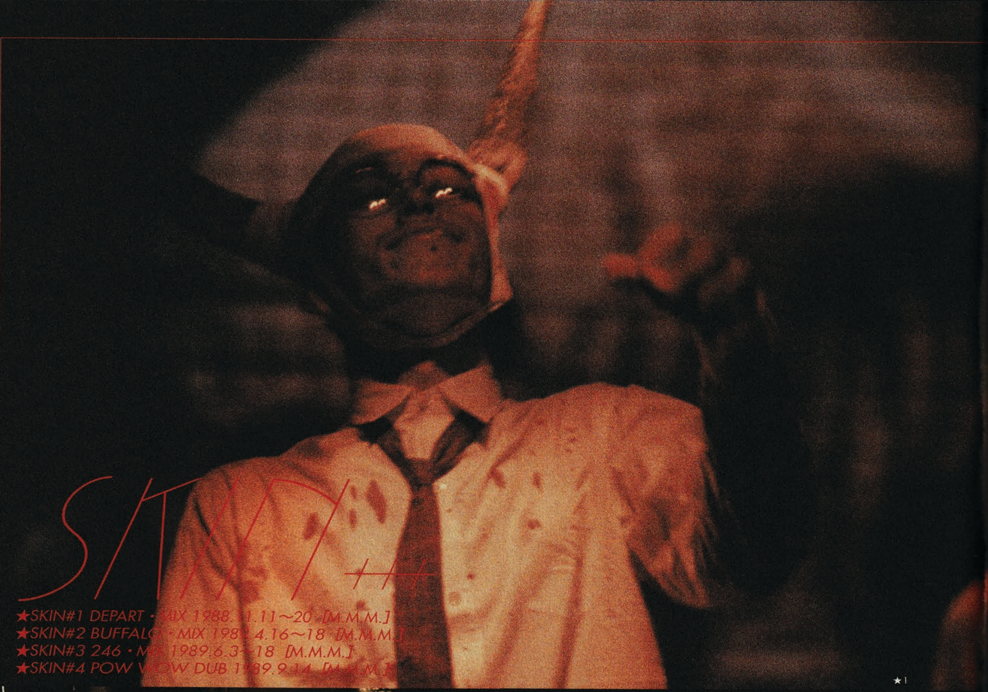
★7



★8



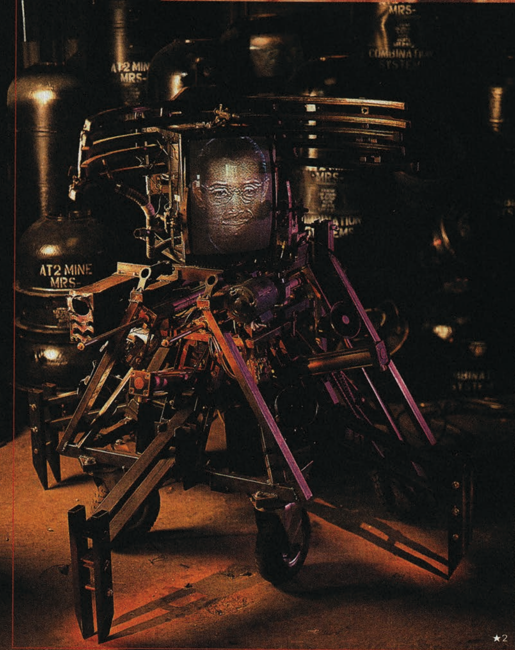
★9



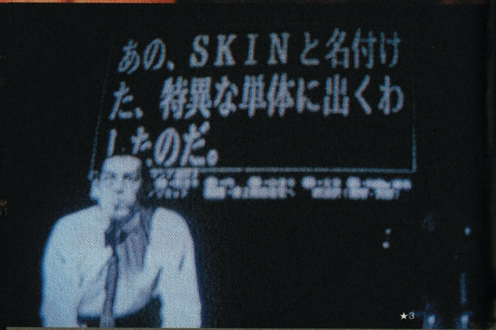
SKIN

★SKIN#1 DEPART・MIX 1988.11.11～20 [M.M.M.]
★SKIN#2 BUFFALO・MIX 1989.4.16～18 [M.M.M.]
★SKIN#3 246・MIX 1989.6.3～18 [M.M.M.]
★SKIN#4 POW WOW DUB 1989.9.14 [M.M.M.]

★1



★2



★3



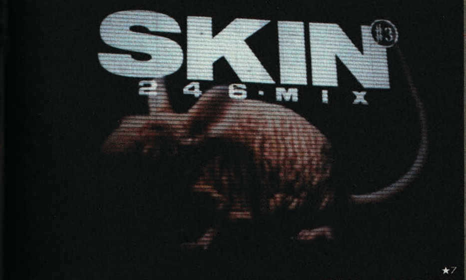
★5



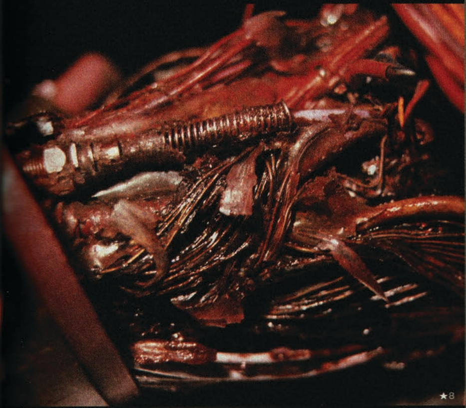
★6



★4



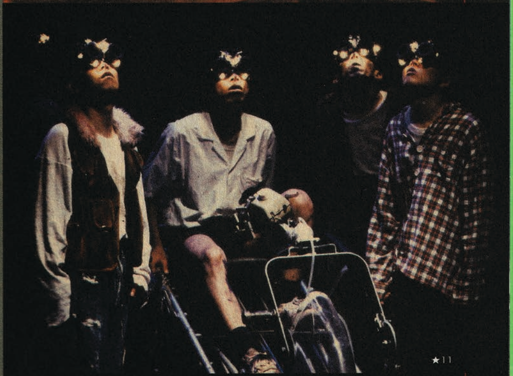
★7

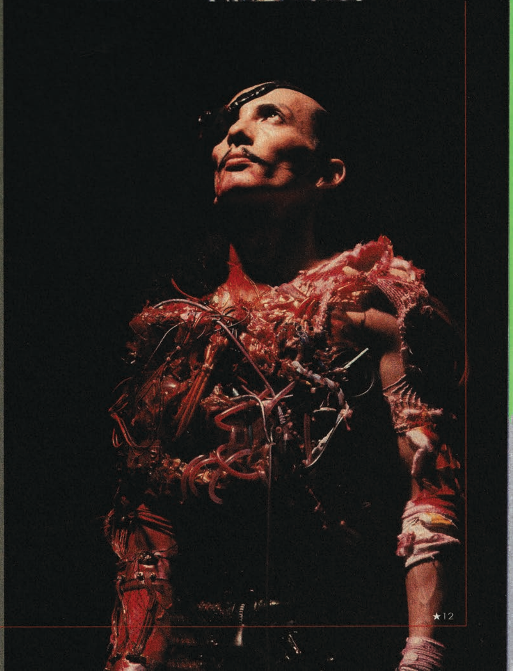

★8


★9

新たにM、M、M、結成、天皇、マシン、バイオテクノロジー、スライド、様々な要素が交錯した「SKIN」。


★10

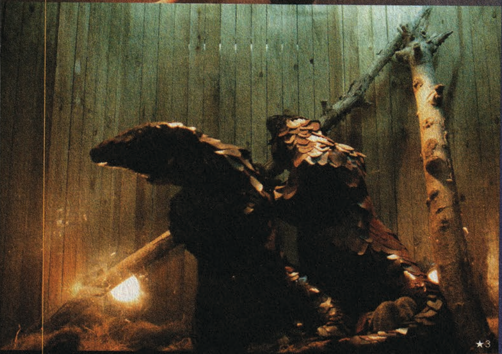

★11


★12

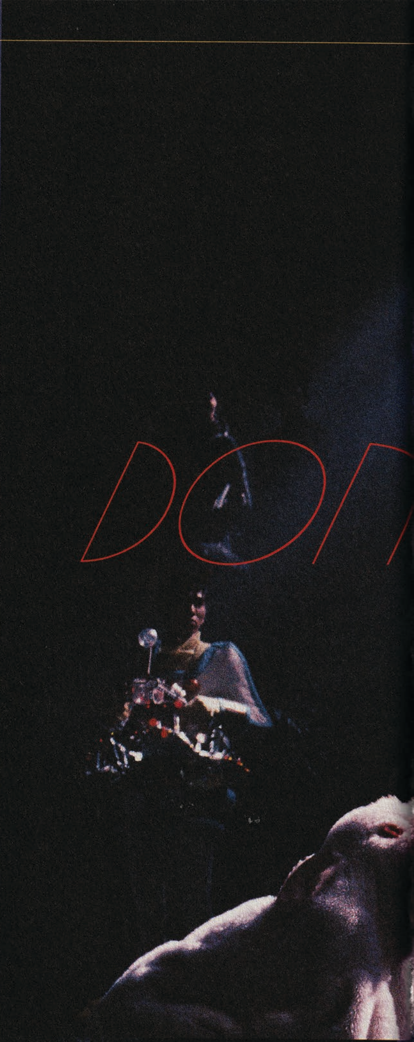
1 ★大学教授シマダ役の嶋田久作。P・NAOMI KAWAKAMI
2 ★「SKIN #3 246 MIX」にて、マシンとなった大学教授シマダ（嶋田久作）。
P・HIROSHI NOMURA
3 ★「SKIN #1 DEPART MIX」にて、大学教授シマダ役の嶋田久作。
4 ★「SKIN #3 246 MIX」ポスター。
5 ★「SKIN #2 BUFFALO MIX」ポスター。
6 ★「SKIN #1 DEPART MIX」ポスター。
7 ★「SKIN #3 246 MIX」のオープニング・シーン。
8 ★「SKIN #3 246 MIX」にて、ホセ（斎藤聡介）の腕。
9 ★「SKIN #3 246 MIX」にて、ドロシー役の大橋二郎と倒れているホセ役の斎藤聡介。
P・落合星文
10★「SKIN #3 246 MIX」にて、ホセ役の斎藤聡介（後）とドロシー役の大橋二郎。
11★「SKIN #3 246 MIX」にて、右からリカの友人ヨハネ（有田睦）、ボブ（上野仁）、
シマダの息子リカ（佐野領域）、ネンド（棚橋ナッツ）。P・笹谷高弘
12★「SKIN #3 246 MIX」にて、ホセ役の斎藤聡介。P・落合星文


★1


★2


★3

コシミハルのコンサート？　飴屋法水の演劇？　着ぐるみのハイブリッド・パフォーマンス「ドナドナ」。



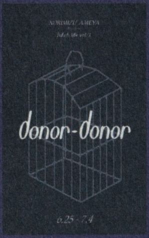

★4


★5


★6

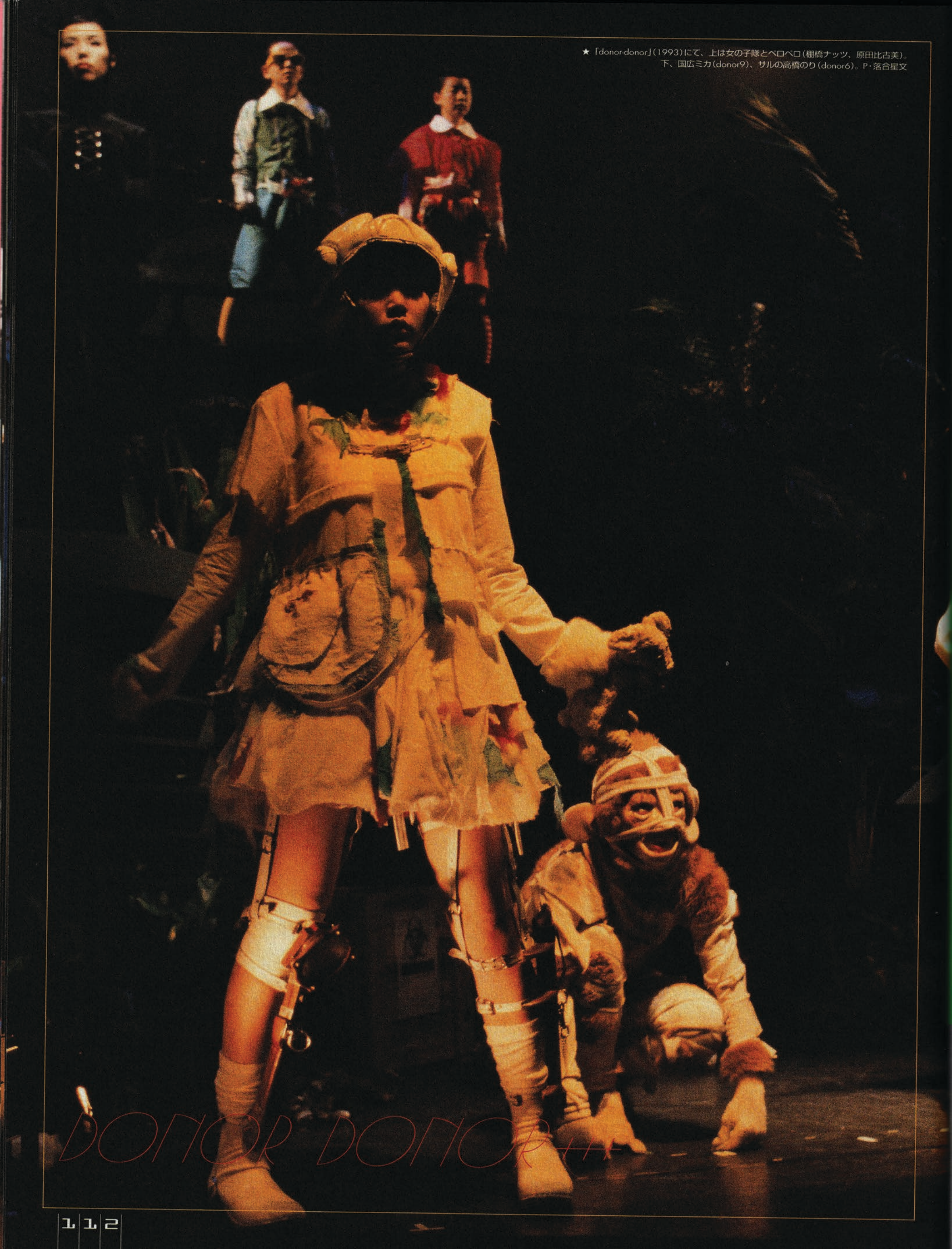


★7



★8

1 ★ donor8（岡田ミカ+満野千加子+渡辺富美子）。P・落合星文
2 ★ 鳥男、上村美裕起（donor1）。
3 ★ センザンコウ（池田ユリヤ+鴨狩美和）。P・落合星文
4 ★ サボテンを食す嶋田久作。P・落合星文
5 ★ 踊るクマ。P・落合星文
6 ★ コバヤシサトル（donor7）は電飾と「バックします」という声を出すトラック野郎。左はコシミハル。P・落合星文
7 ★ 手塚治虫の「ブッダ」で動物を集めて説法をしてる一場面をイメージしたシーン。中央がコシミハル。P・落合星文
8 ★ チラシ



★「donor-donor」(1993)にて、上は女の子隊とベロベロ(棚橋ナッツ、原田比古美)。
下、国広ミカ(donor9)、サルの高橋のり(donor6)。P・落合星文